

令和3年度1学期終業式 訓話

校長 江川 数司

本日で令和3年度1学期が終わりました。

高校という世界を経験した1年生。クラスも替わり、それぞれの進路別の歩みを進める2・3年生。新しく来られた教職員の方々との出会い、すべてが新鮮な1学期を、みなさんはここまで生きてきました。中には、事故に巻き込まれたり、大きなけがをしてしまったたりした人もいますが、それぞれの困難を乗り越えて今日の日を迎えてくれました。一昨日にはみなさんの1学期の成績会議が開かれ、おおむね成績も良好、出席状況も良好であるとの分析を先生方と共有し、みなさんの頑張りを感じたところです。

さて、夏休みに向けて、みなさんに何をお話ししたらよいかと昨夜まで悩んでいましたが、今日は「どん底」について話したいと思います。

この前の土曜日と日曜日、水球の中国大会と野球の甲子園をかけたの大会を応援しに行きました。水球では各県のトップ校とのリーグ戦、高校から始めた選手ばかりの本校は、瞬く間に敵の猛攻撃に圧倒されていきます。元々が足を休めることのできない過酷なスポーツ。本校の選手たちは最後まで泳ぎ切ることがやっとという感じで、大差がついてしまいました。しかし、優勝した山口県のチームには、パスをつないで、つないで、1点を見事にもぎ取りました。野球は先攻の本校が初回に満塁とし、得点の期待が高まりました。しかし、得点はなりませんでした。その後、敵に5回まで毎回得点され、大ピンチに見舞われます。しかし、4回に2点を返し、6回にもツーアウトから2点を挙げる粘りを見せました。試合ができるぎりぎりの部員数で、2人のピッチャーが繰り返し交代する苦しい継投です。できることすべてをやろうとしている姿勢が十分伝わってきました。

1・2年生主体でこれからを見つめる水球部、3年生にとってはこれが最後の大会となる野球部、大会の性格も、大会に込める思いも違いますが、どちらも「どん底」であったと思います。しかし、私は試合を観戦しながら、「みんなは今、すごい勉強をしている」ということを感じていました。私自身にも高校時代、県総体初戦で優勝したチームにボロボロの敗戦で終わった記憶が鮮明によみがえ

っていました。

「どん底」はその世界の恐ろしさを否応なく私たちに見せつけます。でも、それは、その世界の本質、言い換えればその「正体」を明確に示すものなのです。

「どうしてこうなってしまったのか」「どうすればよいのだろう」、私たちはもがきます。しかし、「ドンマイ」「俺に任せろ」、仲間の存在に共に闘う勇気をもらいます。そして、「がんばれ」「元気出して」、応援してくれる人の言葉のぬくもりに心から感謝します。「どん底」だから本気を、「どん底」だから大切なものを手に入れるのです。

みなさんよりも何十年も生きてきた私には、「どん底」で敗れた人も勝利した人も、人間の可能性としては違いがないことがわかっています。情熱をもって努力を継続していけば、追いついたり、追い越せたりできるものなのです。それが何年先になるかはわかりません。しかし、そのような例はプロの世界でもいっぱいあることを、みなさんも知っていると思います。オリンピックに出場するアスリートのインタビューでもよく聞かれます。

実は、このことはスポーツの世界のことだけにあてはまるものではありません。学問の世界でも多くの研究者が「どん底」を経験しています。山中伸弥教授の研究に影響を受け、現在のコロナウィルス対応の「メッセンジャーRNAワクチン」開発の手法を確立したハンガリー出身のカタリン・カリコ博士も、かつては研究の意義が認められず、大学の研究費や企業からの支援金を何度も打ち切られ、大学での地位も降格となるような「どん底」を経験されています。もし、彼女が研究をあきらめていれば、今、接種が進められているワクチンはこの世にありませんでした。

話しが長くなりましたが、みなさんに意識していただきたいのは、この「どん底」を勉強でも経験してもらいたいということです。よく、「あの先生の授業はわかりやすい」とか「この動画解説はわかりやすい」というような声を聞きます。もちろん、限られた時間の中で効率よく学習を進めたい気持ちはよくわかります。しかし、学問の世界は元来、正確で緻密な論理で成り立っています。そのため、特有の専門用語や数学で使用されているような記号がどうしても必要になります。当然、みなさんが日常使っている言葉やロゴから見れば、わかりにくく取っつきにくいものです。ですが、学問の本質に近づくためには、このギャップ

を乗り越えなければなりません。「意味わからん」「ムリ！」は当たり前なのです。

この、小さいけれども勉強における「どん底」経験もまた、とても大切なものです。「どうしてこうなるのだろう」「これで何がわかるの」、いろんな思いを持ちながらじっくり考える、調べてみる、人に聞いてみる、それでもわからない。でも、まだ粘ってみる、思考を止めない。これこそが本当の勉強です。

現代のスマホ社会はとても親切です。検索ボタンへのタップ数回で、いろんな人の解説を手に入れることができます。それは便利で時間のない私たちに恩恵を与えてくれるものです。しかし、中にはわかりやすさを追求したために、事実がデフォルメされてしまった不正確なものや、暗記する方法だけをまとめた学問の本筋から外れてしまっているものも多くあります。また、他人の解説や主張ばかりを集めて、つなぎ合わせた解答は自分の解答と言えるのでしょうか、そして、そうすることは本当に勉強したと言えるのでしょうか。こうしたネット社会に生き、こうした学習の仕方続けた結果、私たち人間の未来はどうなっていくのでしょうか？

私は夏休み中の勉強でも、みなさんがこの小さな「どん底」をいくつも経験すること願っています。特に3年生のみなさん、これからみなさんはきっと経験するはずです。そして、これこそが本当の勉強をしている証拠です。挑戦をあきらめることなく、粘って手を尽くしてみてください。2学期始業式に、やりきったみなさんの笑顔に再会できることを楽しみにして、私の講話を終わります。